

## 3月号の特集

現在、障害福祉制度は大きな改革が連続する中でそれを支える現場は多様な課題を抱えている。障害者福祉の方向性は施設福祉から地域福祉へと大きく舵が切れ、求められる専門性も施設内ケアからソーシャルワーク実践へと変化し、また、障害者自立支援法の成立により三障害への対応スキルが求められるようになった。多様な専門性を要求される職場であるにもかかわらず、常勤換算方式の導入や民間企業の参入等により、雇用形態も臨時雇用やパート職員が多くなり、現場の職員体制は大きく変わりつつある。そして人材不足が叫ばれ、障害福祉現場を担う若者が少ないという憂慮すべき現実と、誠意を持って仕事に打ち込むスタッフのメンタルヘルスが課題となっている。

知的障害児者の福祉現場は利用者の心に寄り添いながら一人ひとりの発達の可能性を導き、利用者の夢を共に実現していく創造的な職場である。また、地域の中でスタッフが生き生きと利用者に関わることで、様々な人や物との繋がりを構築できる奥深い職場でもある。利用者の想いを汲み取るスタッフをどのように養成するかは、支援現場で共通する普遍的な課題である。

今月号の特集では「現場における仕事の魅力」をテーマに座談会を企画、現場を担う若きリーダーたちにご議論いただいた。また、専門性の向上に向けて、職員養成のあり方や実践についてご寄稿いただいた。これからの職員養成を、福祉を考える機会としたい。

職員養成  
— 現場力を高める —特集  
1座談会  
現場における仕事の魅力  
～夢、希望、そして悩み～

出席者 大森 寛和 (広島県・多機能型事業所ウイング サービス管理責任者)  
 刈谷 厚志 (大阪府・萩の杜 支援員)  
 深瀬 和美 (山形県・たんぼ工房 リーダー支援員)  
 南 千穂 (東京都・国分寺市障害者センター 支援員)  
 司会 山崎千恵美 (北海道・いども 施設長/地域支援部会会長)

## はじめに—自己紹介—

山崎 日本知的障害者福祉協会の中では、地域支援部会の部会長の山崎と言います。まじめな進行はできないだろうなあと思うけど、今日はよろしく願います。

出席者の人たちをみていると、様々なお仕事をされていて、おそらく1人として同じ仕事ではありません。名前と所属、自分の地方のこととか、何でもいいので、仕事を含めて自己紹介をお願いします。

おいしいサクランボを食べている人からどうぞ。

深瀬 山形県の愛泉会向陽園のたんぼ工房の深瀬です。たんぼ工房は、25名定員の生活介護事業所です。利用者さんの目的に合わせた活動と自己表現活動を中心に、地域の中でいろいろな活動を展開しています。

自己表現活動は創作活動、絵画活動、手織り、刺し子というような手芸作品作りと、和紙作り、キャンドル製品作りです。どんなに障害が重くても、作業に携わって一人で作品を作ったり、協力してみんなで一つ

の作品を作ったり、また、それを販売して、いろいろな方々とつなげていければいいなという思いを込めて、日々支援しています。

「山形は、おいしいサクランボを食べている」と思われますが、高いサクランボは食べません。市場、販売に出されないようなサクランボを食べています。実は、そういうところが一番おいしかったです。果物も大変おいしいし、そばも大変おいしい山形県です。

個人的なことを言うと、一応主婦で、子どもが2人います。

山崎 ありがとうございます。南さん、どうぞ。

南 国分寺市にある社会福祉法人万葉の里 国分寺市障害者センターに勤めている南千穂です。私の職場は多機能型の事業所で、生活介護事業、機能訓練、生活訓練、ヘルパー派遣、就労継続支援、ケアホームと、今所属している地域活動支援センターがあります。

私は、地域活動支援センターつばさで、ショートステイのコーディネーター、プログラムの運営と、サロ



山崎氏

ン事業で居場所作りをしているので、その担当と、あとは、それぞれに相談を受けています。

国分寺市はブルーベリーが名産で、当センターの喫茶ではブルーベリーを使ったお菓子を作っています。一昨年、チャレンジカップでブルーベリーのお菓子が優勝して、利用する方がちょっと増えています。

国分寺市は、東京都の中でも端っこの方なので、畑も結構多い所です。

山崎 ありがとうございます。大森さん、お願いします。

大森 広島県東広島市にある社会福祉法人つつじで、私は多機能型事業所ウイングに所属しています。法人は、設立当初は主に通所・居宅サービス・相談支援等の事業所を始めて、今は児童発達支援センター、発達障害者支援センター、障害者就労・生活支援センター等、地域全般で障害福祉を展開しています。

私の所属している多機能型事業所ウイングは、主に障害のある方の就労支援に力を入れていて、新体系に移行してからは法人全体で約30名程度の方が就職して、今も頑張っています。最近、発達障害者支援センターを法人として受託したということもあって、発達障害のある方のニーズがかなり高まっているので、その方の支援に力を入れていくということで取り組んでいます。

私の出身は熊野町ですけど、なでしこジャパンが国民栄誉賞受賞の時に送られた、あの熊野筆が有名で、それを作っている所です。

山崎 最後に苅谷さん、お願いします。

苅谷 社会福祉法人北摂杉の子会萩の杜から来ました苅谷厚志です。施設入所支援で生活支援員をしています。私ども法人は「地域に生きる」を理念としています。法人理念の下、僕自身、利用者さんが「生まれ育った地域の中で障害があるなし関係なく、その人らしく暮らしていくにはどういった支援が必要なのか」というのを考えながら日々の支援に当たっています。

萩の杜の中には日中活動支援センター「ふれっと」とショートステイの「ぶれす」が併設されています。その他、当法人内では日中活動支援事業所や、相談支援事業所、児童療育センターやケアホーム等があって、ライフステージや様々なニーズに応じての支援サービスを提供しています。僕自身が萩の杜に勤めて、4年目なので、今日は僕が一番若いのかなと。20代です。

僕は、大阪生まれで、東大阪市の横にある東成区出身です。大阪だと最後はオチをつけなければいけないんですけど、僕はそんなおもしろい人間ではないので、何ともまとめがいがありません。

### そもそもの話……

山崎 ありがとうございます。そもそもたくさんあるお仕事の中から、福祉の仕事を選んで、知的障害者の事業所を選んだきっかけは何だろうというのを聞かせていただければ。

深瀬 そうですね。私はもともと福祉系の短大に通っていて、そこの講師が今の職場の園長だったんです。

山崎 それで目を付けられたのね。

深瀬 授業は教科書そっちのけで現場の話されていて、日々の利用者さんとの関わりで、「こういったおもしろいことあったんだよな……」と。あの頃、私た

ちの生活の中で知的障害者の方に接する機会なんて全然ありませんでした。知的障害の人ってどんな人なんだろうと、全然イメージが湧きません。という中、園長はそういう学生を相手に、知っていると言わんばかりの話をしますが、話を聞いているうちに、「楽しい仕事なのかな、何て魅力的な人たちなんだろう、会ってみたいな」という思いになりました。「夏祭りのボランティアを募集しています」というので、「ぜひやらせてください」と、ボランティアに行きました。そこで出会った、触れ合った、利用者さんたちがあまりにも魅力的で、こういうところで仕事してみたいなと思ったのがきっかけで、勤めました。

2人目を妊娠したときに、一度リタイアして、辞めたときに喪失感というか、すごくさみしい思いがいっぱいになりました。妊娠していてこれから子どもが生まれてウキウキするはずなのに「あの人、どうしているかな」とか、とにかく利用者さんのことが気になったのと、なぜかすごく罪悪感的な、何か残してきてしまったような、やりきったというリタイアではないというのをすごく感じました。

子どもが生まれて少ししたときに、他の仕事に就いても思い出されるのは、愛泉会向陽園で勤めていたときの利用者さんの笑顔だったり、言葉だったり、「ああ、私は、やっぱりあそこに戻りたいんだな」というのを何となく考えていました。その頃「無理なく、今の自分にできるペースでいいから」と声をかけていただいて、今に至っています。

日々、いろんなことがあるけれども、1回リタイアして出戻ってきたわけですけど、知的障害者の福祉、その支援者という仕事から離れることはないだろうという決意というか、そういうものを持っています。大森 深瀬さんの話ではないですけど、入るきっかけになったのは、多分、現場の生の声を聞くということだろうと思います。

妻が先に知的障害のある方の施設で就職しましたが、

仕事の話をしていると、イメージが湧くんです。何かすごく生き生きしているな、というところがあって、関心を持ったというのが、まずあるかなと思います。

それと実際に自分が就職活動をし、そういう職場を探して、施設の先輩スタッフと話をしているときに言われたのは、学生からすると衝撃的でした。今から就職したいというところなのに、「施設なんてなくなっていいんだ」と。「知的障害のある方が地域の中で生活できるようになれば、自分たちの役割は一応終わって、その中でどういうサポートをするかというのはあると思うけど……」というような話を聞いて、僕たちの仕事はそういう役割もあるのか、ぜひここで働きたいと思ったのがきっかけだったですね。

僕はモチベーションの高い学生ではありませんでしたが、そういう話を聞いて、今に至っていることがあります。

山崎 南さん、どうですか。

南 私は3人姉弟で、女・女・男なので、自分は姉からのお下がりももらうけど、弟は新しいものを買ってもらえるみたいなこともあって、対応がすごく違うというか、差別ではないけど、自分だけ……、という思いがありました。

そこから平等であることとか、そういうことには関心があって、大学は福祉系に行きました。在学中にアルバイトで知的障害の人のガイドヘルプをして、初めて支援に入ったときに、年上の方でしたけど、家から送り出されたら、隣に来て、ぴたっと自然に腕を組まれました。初めて会う人だし、信用されるに足る人間ではないかもしれないのに、そんなふうになされ、すごく不思議な感覚がしました。

そこから、言葉ではあまり表現されない方たちとの時間を過ごす中で、この人たちはどういうふうにいるのかなと考えたり、声をあげながら歩く利用者さんとか出かけたとき、何にも悪いこととかをしたわけではないのに、他人からさげすんだ目で見られ、なぜ

そうされなければならないだろう、と思いました。

そのうちに言葉のない人たちが、どうやったら他人に自分の思いを伝えるのだろうか、もしも伝えてくれていたとしても、自分はそれを受け止められるのかなということが関心事になっていきました。そんな時、大学で2週間のスウェーデン研修があって、スヌーズレンという考え方に出会い、実際に見てきて、「ああ、こういったものもあるんだ」と知り、その理念とか、考え方とか、すばらしいなと思いました。

国分寺市障害者センターはスヌーズレンの部屋を持っていて、それがきっかけで今のところに勤めるようになりました。

**山崎** 何かステキなぐらいまじめだよ。ありがとうございます。荻谷さん、いかがですか。

**荻谷** 僕は、ずっとサッカー選手を目指していたのですが、体を壊してしまい、そのとき将来についてちゃんと考えようと思いました。

考えている中で、小学校からずっと同級生のダウン症の方がいて、その人と時々通学のときに会って話をしていました。そんな関わりもあって、特別支援学校の教師になろうかと思っていましたが、受験に落ちて福祉学科に入って「じゃあ、福祉に入ったし、福祉の仕事しようかな」と考えるようになりました。

実習で一時保護所へ行って、そこで子どもと接しながら、「じゃあ、荻谷くん、バイトしないか。夜勤をしないか」と言われ、一時保護所で働くと、いろんな子どもが来る中に、学習障害や自閉症児の利用者さんがいました。この子たちはどういうふうに学校で過ごしているんだろうと、すごく興味がわいて、大学の先生にそれを話したら、「そういえば北摂杉の子会は、発達障害の最先端をいっているから、荻谷君、行ってきたら」と言われて、話を聞きに行きました。後日、先生に常務理事（松上利男）さんから、「うちの法人に来ないか？」という話になっていると、「え？ いいんですか？」と思いながら入らせてもらいました。

**山崎** ありがとうございます。荻谷くんみたいに突然「来るかい？」と言われて、「じゃあ、そうするか」と思った人、自ら選んだ人……、私もそんなに深く考えたわけじゃなくて、実習のつもりでちょっと行った通勤寮で、給料をもらったのよ。きっかけって「東京ラブストーリー」みたいなもので、出会い頭でうまく合ったりしてね。

私も先輩職員の一撃がありました。大学に入って福祉を学んだときに、担当の先生が「福祉なんてクソ食らえだと思え」「福祉なんて言葉がなくなればいい」と言ったのよ、同じだよ。施設がなくなってみんなが地域で生きられるようになったら、豊かな社会だよ」ということなんだよ。そういう一撃があったから、おもしろがって「やってみるか！」と、きっと思うんだよ。

### 辞めていく仲間たち

**山崎** でも、残念ながら、辞めていく人っています。それも思い悩んで、一生懸命やるがあまりに辞めていく仲間たちっていますよね。そういったことが、あなたたちもなかったのか、また、法人の中、事業所の中で、悲しいけれど、残念だけれど辞めていった人たちのことを、どういうふうに考えているかを聞けたらうれしいです。

**深瀬** 私は1回辞めているんです。

**山崎** でも、それは子育てですよね。

**深瀬** というのもあります。2人目のときなので、1人産んで、仕事は続けていました。何で2人目のとき頑張れなかったのかなというのは、今でも考えるときがあります。

出産を理由に、もしかしたら、この職業からいったん身を引きたいと思った自分もいたのではないかと考えたのは、勤めて6年目のときです。そのときは、利用者さんとの関係もある程度できてきて、日々の支

援を進めていく中で、何となく自分の目標を見失ったというか、今の自分に何ができるかが、どこか見えなかった時期なのかもしれないと思います。その中で、やはり職場内でのいろいろな人間関係とか……。

最初の頃は失敗したときに、フォローしてくれる先輩たちがいるけれども、だんだん許されなくなってきます。そうなったときに、フォローできるだけの力が自分にあるのだろうかとか、今の自分が、子どもを抱えていて家庭があったときに、仕事に打ち込める余裕があるのかといったときに、すごく思い悩みました。利用者さんと接するのが楽しい毎日だったはずなのに、だんだんとつらくなってきた時期があって、そのときに初めて、1回身を引こうと思いました。

退職していく仲間たちも、現場で本当に一生懸命打ち込んで、気持ちのある職員が多かったりします。その中には、職場内の人間関係が理由だった方もいるし、あとは、またさらなる夢ができたときです。

**山崎** 南さんはいかがですか。

**南** 心を痛めて辞める方がいます。その人がつらそうなのはわかるけれど、結局、解決するまで一緒に仕事ができなかったりするの、すごく課題には思っています……。

現場は感じる人が多い分、悩むことも多いです。少し支援に難しさを感じる利用者さんがいると、支援者も構えてしまう時がありますが、でも、利用者さんも、敏感にその空気を感じていて、そういうのを感じさせるのはいけないことだと、向き合おうとする人ほど、いろいろなことを考えてしまって、いい支援者だなという人が、心を痛めることが多いように感じます。

**山崎** 大森さんはどうですか。

**大森** 例としてあるのは、悩んでいるスタッフがいました。すごく頑張っているスタッフです。話をすると「自分は、こうこう頑張っているのに、どうも周りが評価してくれないって感じる」と言いました。自分



大森氏

も周りのスタッフも彼のその行動をすごいなといつも思っていました。でも、それを具体的に「それ、すごいいいよ」と評価することにつながっていませんでした。結構日本の文化なのかもしれませんが、それを具体的に言うことがあまりないので、行き詰ってしまった。見ていて、すごく頑張っていて、しんどそうにしているときは、自分がやっていることがはたして正しいのかどうか、迷いながらやっているところがあるのだろうなと思いました。

そこを具体的に「それ、大丈夫だよ。できているよ」「すごいいいよ」と伝えてあげることが、辞めない重要なところなのだろうなと感じています。

**山崎** 日本人って、ほめるのが下手なものね。利用者には、仕事だったらすごくほめるくせに、職員同士で「このときのあなたのここ、すごくよかったよ」とか、「こういう切り口素敵だったよ」とか言わないよね。

**大森** 職場内でお互いに評価を具体的に伝え合う場を持ったことがあります。とにかく、「ほめる」というのをやったときに、現場がすごく元気になったなというのは感じています。

**山崎** いくつになってもそうだよ。若い人であっても、サビ管であっても、課長であっても、施設長であってもそうかもしれません。荻谷さんはどうですか。  
**荻谷** 辞めたいという思いは、今のところありませ



荻谷氏

ん。ただ、一番思うのは、何でこんなに福祉という仕事は評価されないんだろうということです。生活支援をしている立場ですが、大きく言えば、利用者さんの人生を担っている仕事だと思えます。このすごい仕事に対して、世間からは「世話をしている人」という評価しかないから、やはりみんなも辞めていくのかなと思ったりしています。

福祉という仕事は、多岐にわたっているんで、施設によってやっていることも違います。なので、もっと僕らは、自分たちの仕事について大きな声で言っていないといけないのかなとは思っています。

## 福祉とは何か

山崎 ちょっと燃えてきましたね。おっしゃる通りで、日本社会の福祉とは何かということを、今、問いたださないと、えらいことになるなと思っています。

それと私たちの仕事の説明ができていないなと……。一般の人たちに説明する努力、してこなかったのではないかな、自分たちの枠だけでやってきたんだなという反省があるわけです。

この社会の中で、福祉とは何かというところを、若い世代が問い直して、福祉とは幸せと解くとか、あるいは、人間社会がきちっと成り立つように理解すると

か、そんなふうに位置付けて、活動論というか運動論を起こしていかなかったら、ますますヘンテコリンなことになるのかなという気がしたりしているのですが、どうですか？

大森 地域の中に福祉のスタッフが出ていって、障害のある方を支援している姿、専門スキルを地域の方に見せることが、すごく大事だと思っています。

私たちが払っている税金で、こんなすごい専門的支援を、障害のある方、支援が必要な方を、地域の中で生活できるようにサポートしていることを、見せる役割が僕たちにはあると思っています。

そのためには、さっき「説明する力」と言われていましたが、僕が今すごく重要だと思っているのは、アセスメント力です。やはり、主観的な思いだけで話すのではなくて、きちっと客観的に評価できる力がないと相手に説明できませんから。そういうことをしていくことが、福祉の職場の魅力を高めて、評価も高まっていくことなのだろうと思っています。

深瀬 うちの事業所は、ケアホームを建てるときに、反対を受け、園長はすごく苦労しました。初めは地域の方との接点もほとんどありませんでしたが、接点が徐々に増えてきたきっかけは、作品展であったり、毎朝散歩しているのですが、地域の方と出会ったときに「おはようございます」と声をかけさせてもらいました。顔を見て、こうやって関係が作れて、信頼関係を築いていくことがすごく大事なのだろうなと。それが、たとえ大きなことではなくても、散歩、挨拶、ゴミ拾い、何でも小さな一つ一つの積み重ねが、関係作りをしていくのだろうと思います。

南 ソーシャルワークという言葉も、日本語には置き換えられていません。エンパワーメントとかもそうですね。

言葉の意味合いはわかるけれど、ぴったりとくる日本語の表現がなく、説明的になるというか。そういったところで、「利用者の尊厳を守っています」という

ことにしても、実際の場面に理念を落とし込むにはどうすればいいのかが、まずわかりにくくて、説明するのが非常に難しいというか、うまく通じ合えないというか……。理念を共有する難しさにすごく挫折感がありました。

山崎 北海道の浦河町に「べてるの家」という精神障害の方の有名な事業所があります。その人たちの当事者発言は、非常に衝撃的です。当事者の方々と会ったら、はっきり自分の病気を言います。「私の統合失調症は、〇〇〇ってタイプで……」と、自分で説明するのです。それで「病気になったからこうだ、ああだ……」と言うので、こちら側も話を聞きやすいです。

でも、私たちの仲間たちって、自分の障害を自分で表現するのがとても苦手なので、私たちも、面と向かって「あなたは知的障害者、軽度ですよ」「重度ですよ」とか、そんなこと言いませんよね。それがまた、私たちの差別的な発想なのかなと思いますが、なかなか難しいところなんです。ありのままでもいいと言いながら、実は社会ってありのままではだめでしょう。やはり日本の国家のルールに従って、きちっとしなければならぬ部分も十分あります。知的障害に携わる人たちの仕事は、その辺の難しいところがありますね。

## 現場における達成感

山崎 比較的障害の重い人びとと関わっていると、達成感は、結構難しかったりするよね。私の具体的な仕事は一般就労支援なので、変化があるのですが重い人の日中活動とか暮らしとかは、なかなか変化がつかまえていく部分があります。一人ひとりの仕事の中で、どういうところで達成感や生きがいを持っているか、具体的な話をしてもらえればと思います。

荻谷 支援計画を作って、それに沿って利用者さんの支援ができたのかを、親御さんや本人さんに提示する

ときに達成感を感じます。障害の重い利用者さんを支援していることが多いので、平凡ですが利用者さんが穏やかに1日を楽しく過ごすことができたらいいと思ったりしています。その中で、いかに本人の自己決定というか意思決定を支援できるのか。利用者さんへの支援が、知識としてある次元でこうしたほうがいいのか、その特性を生かした支援ができていくと一つの達成感なのかなと。今まで得た知識を経験というのは、僕は次の後輩に伝えていけないといけないのかと、今はすごくその辺を試行錯誤しながら勉強しているところです。

山崎 深瀬さんどうですか。

深瀬 うちの事業所は年齢も障害も幅広い利用者の方が通ってきます。軽度の方たちは変化が見えやすい、言葉でも表現できる、いろいろなふうに伝えてくれるのでわかりやすいのですが、障害の重い方々は自己決定もなかなか難しいし、変化が見えづらいです。利用者さんと関わっていて、新しい一面の発見や、笑顔を見せた瞬間に立ち会えたことが、すごくやりがいにつながります。

これまでは自分が実際に動いて利用者さんと関わって、自分が達成感を味わえたという満足感を得て……。自己満足ですよ（笑）。やりがいを感じてこの仕事を続けていましたが、今はリーダーという立場になったので、すごく難しさを感じています。人生経験が未熟な私が、リーダーとしてどのようにしていくか、とても悩んできました。最初の頃は他のスタッフよりも自分が動いて、自分がしたことをスタッフに見せて、それで何かを感じてもらっていましたが、それだけでは伝わりません。悩んだときに、直属の上司にいろいろなアドバイスをもらいました。スタッフと一緒に取り組むことをまずやってみたらいいのではないかとということで、個別支援計画作成の過程を、スタッフと二人三脚でプランニングしました。まずは利用者さんに関わるスタッフに、自分がリーダーとして寄り

添うように努めました。

スタッフと計画をどう進めていくかを一緒に相談しながら進めていく中で、利用者さんの夢が一つ実現したときに、利用者さんはすごく達成感、満足度を味わえたし、それと同じようにスタッフも満足度、達成感を味わえ、そのことによってまたその利用者さんは次の夢を持つことができ、またそれに共感できたというスタッフの姿、利用者さんの姿を見たときに、リーダーというのはこういう役割だなというのを学ばせてもらって、そこですごくやりがいを感じました。

山崎 なるほど……、すごいですね。上になるのはつらいもんですね。私も一番下だった時がいいなと思う。自分だけ一生懸命やっていたらいいんだもんね。南さんはいかがですか。

南 ある利用者さんと知り合ってから5年経って初めて、この人のこの動きはこういうことを伝えてくれたんだ、というのがわかった瞬間がありました。その当時は、私はもう他の部署にいたので、その方とは直接のやりとりはありませんでした。1年間一緒にずっと日中の時間を過ごしていたのに、全然わからなくて、ふとしたときにまたその部屋に行ったときには、「こういうことだったんだ」というのがわかってすごくうれしかったです。その感動だけ覚えていて、何に気付いたかも覚えていませんが……。

ある時こんなこともありました。言葉のない人が、ジェスチャーで自分が水族館に行ったことを話していましたが、私には全然わからなくて、「あ、魚食べたんですか?」と言ったら、そのうちに床に寝転がってオットセイのまねとかをしてくれました。それで「あ、水族館か」とわかりました。お互いがびったり「ああ、こういうことだったんだね」とわかり合えると喜びがあります。

発達障害の人たちの独特の考え方や独特の結びつきがわかったりすることも、すごくおもしろいというか、うれしいです。

山崎 余裕があるよね。年をとってくると、発達障害の不思議さに私は太刀打ちできないの。私には、彼らの世界観を、そういう世界観だと認めるだけの余裕がないんです。日常の様々なことで困惑することが多くって。大森さんどうですか?

大森 就労支援の現場でジョブコーチとして働いている頃は、わかりやすい達成感がありました。就職につながったとか、それで働いている姿を見るときは、かなり達成感がありました。あと、従業員の方と話をし、「すごく助かったよ。戦力になっているよ」という言葉を聞くのはとても達成感があります。

今は重い自閉症の方も支援させてもらうようになって、確かにそういう日々の達成感が見えにくいという状況があります。個別支援計画が重要で、ニーズよりいかに適切な支援課題を設定できるかがポイントだと思います。彼らのニーズをうまく把握することができたら、変化もわかります。変化は小さいですが、日々の支援の中で若いスタッフと共有することでチームとして成長しますし、僕らの支援が減っていき、1人で自立的にできるようになっているところを見るのは、すごく達成感につながっていると感じます。

### 「日常に幸せを感じる？」

山崎 そうですよ。見方を変えたら全部そのようになっていくよね。今、北海道はものすごく不況なので、職場が本当に厳しい状況で、就労している利用者とも日常的に厳しいやり取りがあります。

でも、生活介護だとかB型だったら、和やかというかなだらかな中で、一人ひとりの目的と達成感と我々支援者の達成感とどうかみ合わせていくかは、結構難しいよね。東京のディズニーランドに行くのも、利用者の暮らしのアクセントになる、私たちの世代は非日常に幸せを感じる世代で、20代は日常に幸せを感じるタイプなんだとか言われているけど、世代的に

はどう?

深瀬 私は30代ですが、どちらかといえば非日常に幸せを感じますかね……。

山崎 利用者さんもそういうところがあるって?

深瀬 あると思います。淡々と季節の行事をやりますが、季節の行事とかイベントは非日常ですよ。職員の捉え方はどうだろうと思ってスタッフと話をしますが、「非日常だからもっとはっちゃけて、ぶっちゃけて、私たちが羽目はずすかのように、利用者さんにも羽目はずした楽しみを味わってほしいね」と言いますが、その辺の共有が難しい時があります。

利用者さんは「これはしてはいけません、あれはしてはいけません、迷惑をかけてはいけません」という制限があって生活しているところがあると思いますが、そうではなくて、非日常を楽しむ瞬間もないと、生きているというか、暮らす楽しみにはならないのかなと感じます。

山崎 そうだね。そういった意味では、今、景気が悪いからね。昔はハワイとか、施設はどんどん旅行とかをしたじゃない、今はしないの?

深瀬 旅行は結構行きましたね。

山崎 今は報酬が日額制になったからなかなか難しいですかね。そういった意味では、作業のモチベーションとかで、穏やかな何ともない日常は本当に尊くて大事ですが、それをやったら達成感で何かがあるという、そういった目標も時には必要かもしれないよね。

### 「時代を拓く」

山崎 私はちょうど「福祉元年」の頃に大学生で、1976(昭和51)年に大学を出たので、日本の高度成長と福祉の充実、そういう世代でした。いい時代に生きたのよ。だから、個性的な大先輩がたくさんいらっしゃって。例えば、北海道には、その人は教育者でしたが、戦争で片腕を失った方で、「片腕の生前香典」

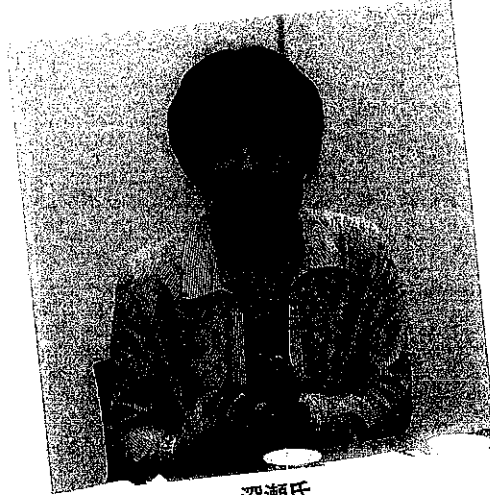


南氏

と言って、生きているうちに香典を集めたりして、当時の知的障害のある人のために学校を造る、施設を造るとか、そういう個性的なオジサンたちが時代を開いてきたわけよ。でも、これからは皆さんのような、まじめに障害のある人のことを考え、あるいは社会や地域のことを考えている人たちが時代を開く時代だと思う。

皆さんの法人は地域に根差して、ということをやっていると思う。普通に暮らしている人は別に地域を意識して暮らしているわけではないんだよね。たまたま入所施設が圧倒的に多くて、入所施設に対して「地域」という言葉を使っているけど、どうなのかなという感じがするんですが、その辺の斬新なアイデアとか、新しい時代はこうあるべきだ、地域という問題も、こう思っているとか、話を聞かせてもらえれば。

南 私は世代間の違いみたいなものを最近よく感じていて、年配の方たちと、若い人では少し隔たりがあるように思っています。それは人材を育成していくときにも、以前は職人肌というか、それこそ料理人だったら鍋の底をなめて味を盗めという感じで、自分で仕事を身につけようといった意識に感じます。今の若い人たちは、まずこの仕事の楽しさを教えて、本人がわかってからでないと、自発的な動きはあまり見せないように感じます。



深瀬氏

私がある人に言われたのは、「福祉を学術的にきちんと理論を持って説明して他に訴えかけていく時代に入っただよ」という言葉でした。そういう意味では時代が何十年か流れたような。以前、ある雑誌の特集で、ここ数年で社会的地位が上がってきたものの1位か2位が福祉職でした。高齢化が進み、介護保険ができて、高齢者福祉が市民権を得たのが、福祉の認識が変わるきっかけになったのだと思いました。

山崎 その中で、変わらないものはないのかな。

深瀬 私が新人だった頃と、今の若い新人さんたちを考えると、今の人たちはすごく大変だと思います。自分たちよりも、今の新人さんのほうがずっとずっと大変だし、ずっとずっとまじめに勉強もしているし、立派だと感じます。私が新人の頃は、本当に熱意だけで仕事をしていたというか、何の理論も持っていなかったし、勉強もしていませんでした。でも、先輩たちが「背中を見てついてこい」という感じではなく、隣に寄り添って、何かあったときにすぐ相談に乗ってもらえたり、利用者さん一人、一つの支援すべてにおいて事細かに説明をしてくれて、一緒に実践してくれて育ててもらってすごく幸せな時代だったと思います。

今の人たちは、うちの法人だけでもないと思います。新人さんが入ってきたときに、早い段階で一人前になることを求められているというか……。若い人材

が入ったときに、ある程度長いスパンでゆっくりと育成していくことも大事だろうなと思います。

昔は職場でも一つの家族みたいいろいろな幅広い世代がいて、その中で相談し合ってみんなで支え合っ仕事をしていましたが、今は若い人たちは若い人たちだけで固まってしまって、そこだけで悩みを抱えてしまったりとか、うまく解決できないと、職場を辞めてしまったりということになっています。これからの福祉を支えていくのは若い世代だと思います。自分たちも先頭を切ってやっていかなければいけないと思いますが、私たちが求められているのは、次の担い手を同時に育成していかなければいけないこともすごく大事なことだと思います。自分にも余裕がなければだめだと思うし、そういうスキルも身につけていきたいです。それが結局、利用者さんのためにつながっていきます。世代が違う、考え方が違う、価値観も違う、それは当たり前だと思います。でも、今、目の前にいる利用者さんに対する思いは世代が違っても同じだろうと、そこは変わらないと思いたいです。

大森 僕が今、個人的にすごく感じているのは、この分野のスキルを高めていくことも重要ですが、今は他の分野についても強い関心を持って、掛け合わせて自分の分野を高める人材が必要だと思っています。ジョブコーチの支援をしていたときに、最初に衝撃だったのは、企業の文化を全然知らないということ。そういうところは、結構福祉の分野の人は疎いところがあると思います。いろいろな分野の知識、技術を身につけて、掛け合わせて2つのものがあるとオンリーワンになれるというところで、特色を出していきます。いろいろな福祉サービスが普及する中でいかに強みを出していくかになっています。

平成24年度は、人材確保に関する仕事に携わりました。そのときに感じたのが、これからの人材確保の競争相手は、福祉分野の方だけではなく対企業との人材確保の競争だと、僕らの法人にしても、人材として

は福祉の分野を勉強してきた人間だけではなく、もっと違う分野の勉強をしてきた人間が欲しいです。今いるスタッフと一緒にいろいろな掛け合わせになって、魅力ある人材を相互に作っていき、それが結果として障害のある方に地域の中で生きていくための力、支援につなげていくことができると思っています。僕らは情報化社会の中で、自分の興味、関心があるところの専門性、技術も高めていくことがすごくいいと思っています。

山崎 大森さんは、何に興味がありますか。

大森 僕は、最初はマーケティングとかそういう言葉は知りませんでした。企業の人材は、論理的にいろいろなことを組み立ててやっていく技術を身につけて仕事をしているというところで、福祉の分野もそういう技術、知識を身につける必要があると思っています。

そうすることが支援の根拠を明確にするという点につながると思います。

山崎 そこは勉強になりますよね。刈谷さんは一番若いけど。

刈谷 よく社会で「ゆとり世代」と言われますが、僕はちょうど谷間です。どうも僕の下世代は、自ら行動して、支援を展開していこうと思って仕事をしていないのかなと感じるところもあります。

僕自身からの一方的な関係よりも、下の代からもっとアイデアを出せるコミュニケーションを取っていかないといけないのかと思ったりします。アイデアを出すためにはどうすればいいのか、人材育成、研修や、自閉症の勉強会があるとか、そういうことは私の法人はよくやっていますが、これからは法人内だけでとどまらず、他事業者や他の施設との交流も必要かと思ったりします。

山崎 4人ともこの仕事は魅力的だ、やりがいがあるというか、私はやりますということを決めているのよね。「この仕事でよかったのかな？」という思いは少しあるけれど。次に私たちの仲間になる人たちに自分

たちのこの仕事を伝える、こんないい所にいらっしゃいよということはあるかな？というの、介護現場でも、男性の結婚退職が出てきている、嫁さんをもったら食べさせることが大変だから、「結婚を機に辞めさせていただきます」という介護士がどんどん増えてきた。それを「男性の結婚退職」って言うんだけど、普通は女性でしょ。自分の人生設計を立てられないということ。それはきっと、給与の面ということだろうね。例えば、結婚して、家を建て、子どもを育てて大学まで行かせて……。みたいなことを計算できない仕事になっているらしい。障害福祉も、もしかしたらそうかもしれない。だけど、何回も皆さんが言っているように、利用者さんの人生と寄り添うことがこんなに楽しいのかということをアピールする以外ないよね。この仕事は金持ちになりますよというアピールはできないので、最後にそれぞれの言葉でメッセージをもらって終わりにしましょうか。

### 最後にメッセージを

大森 僕たちの仕事は周りから曖昧な仕事のようなイメージで思われているところもありますが、人に対する仕事で、人の成長をサポートする仕事という意味ではすごく魅力的な仕事です。そして自分のやりたいこといろいろなことが実現できたり、取り組める可能性があると思います。障害のある方の支援をする際にいろいろな経験やチャレンジを支援してあげることが大切なことで、私自身がやりたいこととつながって良い方向にいったりすることはとてもうれしいことです。深瀬 さっきの達成感とか満足度とかにもつながっていくと思いますが、私は、この仕事をすごい職業だと思います。なぜかという、障害をもっている方々ですが、一人の人の人生を支えている職業であること、その人生の一部だけでなく、成人ですから時には人生の途中からですが、最後の看取りまでを携われる職業

特集  
2今よりも一段上の実践集団に  
なりたいたいと思う

西原雄次郎

ルーテル学院大学教授



知的障害者福祉の実践は奥が深い。学ばば学ぶほどそれまで気付かなかったことが見えてくる。実践を続けながらも、一人でも多くの皆さんに学ぶ機会が提供され、議論と試行錯誤が重ねられる現場になってほしいと思う。

組織的な取り組みと個人の努力がかみ合って、今よりも一段上の実践集団になりたいたいと思う。その結果、利用者の皆さんを主人公としながら、若い人が働きがいを感じ、長く働き続けられる職場に変身したいと切に願っている。

であることはすごくすばらしい仕事だと、私は思っています。

その中で、その方々の変化や、そういった瞬間に立ち会える喜びは、何ものにも代え難いと思います。作品が生まれた瞬間、できあがった作品を見て、利用者さんたちが「うわー、すごい」「できた、やったあ」という感情を爆発させる瞬間に立ち会えるのは、一番この仕事をしていてよかったと思う瞬間です。

そういうところに立ち会えて、その思いに共感できる職業はほかの職業ではなかなかないと思うので、ぜひ若い方がもっと増えてくれるといいなと。若い世代にも、また、この職業を知らない人たちにも伝えていきたいと思っています。

山崎 すばらしい!では、どうぞ、南さん。

南 この間あったことで、少し印象的だったことが、自分の病気は家族にも受け入れられていないという話です。私たちが知り得る情報は、多くの場合、その人があまり外に出したくない情報だったりします。だけど、話してくれた。それに、人とのつながりや結びつきを感じました。

言葉のない人ですが、自分の好きな職員が結婚したときの写真を見たときに、いっぱい拍手をして、椅子から床に下りて正座したり、体で私たちにも最大級のお祝いをしてくれたりとか、私とご飯を食べるために1時間も食べずにずっと待ってくれたりすることもありました。誰かと食べたいからとご飯を待つことは自分はありません。

でも、そういうことを見たときに、自分自身が生きるとはどういうことなのかとか、幸せはどういうことかと考えるきっかけをもらっています。人が、人と生きるそのことを見つめられることが、自分にとって幸せになって、そういう仕事の楽しさがあるかなと考えていました。

山崎 なるほど。刈谷さん、どうぞ。

刈谷 この仕事は、ある意味時代の最先端を行って

るのかなと。これからの社会の中で一番何よりもすごく重要な、幅広い分野、また未知数な仕事なので、逆に、誰でもトップになれる職種なのかなと。先ほどのようにやりがいの中ですごく心が満たされる仕事でもあります。そういう意味では、「仕事が人生だ」みたいな仕事だと思ったりします。

すごくしんどいところはあるんですが、逆に、しんどい部分を超えるような逆転できるようなところがあるのかと。この仕事はわからないことばかりです。だから逆におもしろいと思っています。利用者さんについても勉強しないといけないことがあります。すごく可能性のある仕事だとは思っていますが、まだまだ僕自身力量不足だと思います。確かに、この仕事の収入で家族を養うのは難しい状況があり、改善が求められます。

山崎 どうもありがとうございます。私も若いときから仕事をしています。いったいいつ家に帰るんだろうというぐらい。法人を作ったときに、職員には週40時間の勤務時間が厳しくあって、週40時間といえば週休2日にしなければいけない、とてもやり繰りできない。だって、利用者さんは昼間一般就労していて、私たちは、夜と朝の仕事だから、どうにも組み立てられません。でも、自分のオンとオフがきちんと分かれる仕事にしたいなと思っています。利用者さんもオンとオフがないとだめでしょう。だから、「ただいま戻りました」と一般就労から帰ってくる人たちには、本当にご苦労さまという気持ちを込めて「お帰りなさい」と言うようにしています。だから、そのことを利用者さんと分かち合ったときに、この仕事は、人としてすごく成長するというか、そういうのはあるよね。その中で、私たちがいかに社会的に弱い人たちとともに生きていくかというところに視点を合わせた、こんないい仕事はないよね。そして結婚しても、子育てしても大丈夫な仕事になるような努力をすべきだよな。

もしよければ、どうぞ札幌に遊びに来てください。今日はどうもありがとうございました。

## うどん店の片隅で

ある日、自分の関わる社会福祉法人が運営する小さなうどん店のカウンターの隅っこで、私は一人でおいしいうどんを食べていた。すると、カウンターの内側で麺をゆでていた知的障害のあるAさんが、いつの間にか私の側に出て来られて「どうしたの? 疲れているの?」と言われた。私はとっさに「いやあ、もうお爺さんですしねえ……、歳ですよ!」と応答していた。すると彼は「そんなこと言っちゃだめだよ! いつも未来に向かって頑張らなきゃ!」と言われた。そしてすぐにまたカウンターの内側に戻って仕事を始められた。

私はその時何を考えていたのか定かではない。ほんの一瞬の出来事だったが、おいしいはずのうどんを、多分本当に疲れた様子で食べていたのだろう。その私を垣間見て、居ても立ってもおられずにカウンター側に出てきて励ましてくださったのだった。私はとても温かい気分になされた。

知的障害という「障害」の様子は本当に千差万別である。この時のAさんの言動は、言われた私にとっ

てはとても心温まるもので、このようなことができる彼の「障害」について、あらためて考えさせられた。Aさんは麺をゆでるという作業をしながら、お客である私の様子に関心を寄せ、顔なじみの私の様子がどうも元気が無いように思えて気になり、一声掛けてやろうと私の側へやって来て、最初は「どうしたの? 疲れているの?」と様子を尋ね、それに対する私の応答に反応して「的確な励ましの言葉」を投げかけてくださった。この一連の言動は相当高度な思考過程があつてなされていることであり、若干の場面对応のずれや、調理中にカウンターの外へ出てくるといったルールに反する部分はあつたけれども、彼の思いやりの気持ちや、心配してくださっていることは十分受けとめることができた。

知的障害の方々と関わっていると、シリアスな厳しい状況に直面させられることもたくさんあるが、一方で、実はホッとさせられることや、「うふふふ」と笑ってしまうこともたくさんある。あらゆる仕事がそうであるように、知的障害者に関わる仕事も、気が滅入るようなこともあれば、心が愉快地、本当にハッピーにさせられることもたくさんある。少なくとも